

兒童の性格

安部 光 植

—

うちみたるころ、兒童は至つて平凡で、他愛ないもの、言はず不完全、未完成極まる生存のひみつこの可能的成長態をしか映じないであらう。しかし、そこには大人の自負の嬌慢がかくされてゐる。若しわれらにして、われらの自負の嬌慢を去り、養護者としての權勢を威冠を潔きよく脱ぎ取り、子供達への永い慣習を切り切つてゐる壓倒的態度を率直に退け、かつての兒童に對するあらゆる感慨をいまひとたび検討し、ひるがへつて白紙的眼光に信賴し、新たなレンズを通じて、兒童を眺め得たならば、かれらはいかなる姿態に活動の様相に於て現れ來るであらうか。換言すれば、兒童の眼ざし、行動、感情の動きを、その根本傾向がもつ自然のまゝに認識し、同情、同感、共鳴を通じて觀察するならば、われらはわれらの從來の兒童認識が、い

まや殆んど謬見の塊であつたを悟らないではゐられないであらう。而してひみはおそらく、兒童の世界が、以前とは全く異なる光によつて蓋はれ、かゞやいてゐる原型的兒童の姿をまのあたりに見出すであらう。本來の子供は自らを完全に樂んで生活してゐる。かれらはつねに、自己を存在の中心に置いて、物事を觀かつ感ずる性格者である。しかし子供のこの自己中心的意識乃至活動は單なる功利的自己中心性ではなく、かへつて、たゞひみつの存在としての彼に與へられたまゝの全體的の中に安住する自己中心性以外のなにもでもない。

兒童の注意は間斷なく移動する。彼は存在を自己に引き聚めるのみではなく、自己をあらゆる存在にくつゝける。自己をあらゆる存在に近づけるのである。自分をいたるところに持ち運んで、對象存在の眞性存在がまゝの性格を觀

察しようとする徹底的活動者、徹底的存在愛の具現者こそ、兒童そのものである。燭臺の蠟燭の光がその周邊を明るく照し、光の輝く場所は燭臺の移動と共に、照明の中心が移動する。そして周圍はなんの損傷も受けない。

子供はすべてのものが自分のために存し、自分を喜ばすために存するかのような如き態度を以て、周圍の存在に働きかけられるかに見える。ところが、この生ける蠟燭は自分を燃焼しつゝ、完全に自己を放射する。自己を決して隠蔽することなく、あらゆる存在の前に開示する。兒童は環境の中に自己を投げ込み、單に托してゐるのみである。子供は自己活動の所在、意識の對象を刻々變化する。子供は周圍的存在を刻々新たにして前進する自分を少しも悔ひようとはしない。火花を散らして周邊を照しつゝ、しかもなんらの未練なくそこを跳び去り、疾走し、亂舞する彗星の如き生活をして、寸刻も休みなくつゞけてゐる。いまこゝで土いぢりをしてゐると思へば、もう跳び去つて、向ふの杉並木の側を走つてゐる。しかも子供の心の素直さの實踐的表現に際しては、素早い曲線の圖式に於て示される。かれらの歩み、

跳びはねる線を追へば、明らかに直線の曲線である。林の中にもぐり込んだり、出たり、石拾ひを始めたり、ホンの少しのあい間でも千變萬化する。うつかりするに、私達はひきりの子供を二人にも三人にも見ないとも限らない眼まぐるしさである。

二

子供はおごろくべき活動力を持つてゐる。彼はいたるところに自分を發見する。しかも極めて必然的に、いたるところに自分を惜しみなく棄てゝゐる。行くところ自分を發見せざるはなく、去るところ自分を惜しみなく棄てざるはない。あらゆるものに關心をもつ魂は、また極めて容易に、あらゆるものへの執着をあつさり斥ける。部分に活きて全體を忘れず、一物に捉れて捉はれない生活の完全な遂行者こそ兒童そのものではないか。子供の注意は集中的であると同時に放散的である。集中的注意は次の瞬間には崩れて更に新たな活動若くは存在への放散的注意が始まる。放散が集中が交互に繰返されるところには一物に捉れ難い純客觀認識が成立する。しかもそこに特異な點は、對象に自分

の一切を投じて惜まず、かくすることによつて、対象の全機構を苦もなく印象づけられることである。自己を完全に解放するものは対象を十全に受納れ、根本から了解することができる。

子供の自己中心的生活は、まさに右の如き意味のうちに解釋すべきである。一つの場所、一つの物に注意して、しかも一處一物に捉れ難い注意のはたらきは、存在への功利的無關心を實證するものと言はなくてはならぬ。それは部分に居て部分に居らぬものゝ振舞である。部分に居て全體を忘れぬ先驗的自覺存在の所作である。それは必然にして普遍的な行爲者の態度である。利害に生きないで純愛に生きるものゝ行爲である。かけひきを知らぬ子供は、全力、全注意を以て、瞬間から瞬間に飛躍する。弛みなき緊張さを以て活動する兒童の生活は、その瞬間々々が、まさに疑ひもなく創造的瞬間でなくてはならぬ。それは慣習や傳統の惰睡とは異つて炤ゆる魂の爆發である。蝴蝶が本能的に花から花へミ跳んで蜜の在處を觀る如く、兒童は対象の性向、本質、態度、傾動を不思議にも鋭く直觀する。この慧

智こそ實に超人間的慧智である。

三

兒童にして若しその行爲が、自己中心のであるらしく見えるならば、かく見做すは適意であらう。しかし最も個性的なるものこそ、最も普遍的、必然的のものでなくてはならぬ。子供の自己完全的生活は、大人に於ける排他的行動・利己的態度とは決して同一ではない。ひきは対象を利己混同し易い。これに對して兒童は全く純愛によつて萬物と連なる。兒童が対象に對する愛は、その純粹さに於て、たしかに天(普遍者)の、絕對的主觀の萬物に對する愛を象徴する。兒童はあらゆる存在のうちに自己をみ、人間界のいたるころに自分を見出さうと努力してゐる。子供は超有機的、生命のうちにはたらいてゐる。兒童は必然性も普遍性に活きてゐる。兒童の内的必然性も全體的存在の普遍性とは不思議によく調和する。存在に對する純愛がそこから生れる。ものを本當に愛し、直觀するところに、ものが微笑もて對せざるはない。隙間なき主客の内的結合は、自他の根源的同質性を直觀せしむる。対象のうちに自己發見をな

し得る可能性は、その故に兒童の魂の純粹性にもこづく。

偏見、邪心、先入主、功利的觀念——等は事物ミ事物の自然性を引き裂き、主客の間に打越え難き距離を置く。全體は消えて部分が注目され、部分を全體ミ假想した活動がもつばらになる。あらゆる存在をつなく本來の必然的・普遍的絲は斷切られて、宇宙は孤立的小宇宙の群像となり、人間は利害得失によつて雜然離合する。事物の純客觀的考察は衰へて、主觀に色彩られた第二次的客觀形象が呈示される。自他の間には幾重にも功利的柵がめぐらされ、人間が存在するだけそれだけ、無數の廣狹、厚薄の不透明な柵が交錯存在して、物の公平、正直な觀察は、救ひ難き破産に遭遇する。自他の所有物は嚴しく限定せられ、利ミ偏愛の刃によつて事物の人爲的限界が決定する。しかし、子供は、現在在の複雑さの中に、かへつて清淡單純なる生活の營みを建設する。ひここの世の複雑さは、兒童には容易に理解でき難い或者である。

こゝに人間生活の殘餘性があり、純粹性がある。子供は大人の棄てゝ顧みない生存場所て嬉々として戯れ遊んで

る。子供は利害で濁つた海には棲みえない天魚である。こゝには全體が活き、超人間界が堂々現實してゐる。存在は各々自個を保つて、しかも全體ミしつかりつながつてゐる。兒童は物をそのまゝに活かして觀る。一物に執著しない。萬物を忘れてゐるが萬物に愛されてゐる、萬物に執著しないものは、かへつて萬物みづから近づいてくる。萬物を愛するものは一物を偏愛しない。子供はあらゆる物にはたらきかけて、しかも萬物に居らない。故によくあらゆる對象を抱き、あらゆる對象に抱かれるこゝができる。こゝに兒童生活の著しいひここの特徴がある。兒童の自己中心的生活は、固定的ではなくかへつて移動的であり、集約的ではなく開放的である。子供は一物、一處に專念して、日常的功利生活を築き上げる意識を落してゐる。一物に捉はれない對象への愛感、あらゆる事物に對して平等である。あらゆる事物への對等的感情は兒童性格の本質である。

兒童は事物に憎みを懷く以前に、素早くそれから飛び去る。こゝで以前ミ云ふ意味は、相對的ではなく、絶對的意味に於てある。兒童は一物を愛するか、でなければ他の

一物を愛するのみ。憎みのこゝろは、まさに兒童の關知せざる世界である。その明瞭、純粹な精神に新鮮な觸覺は、子供をして憎みの對象を持ち得る隙を與へない。子供はすべてのものに一樣、同仁である。大人の注意は固定し勝てあるが、子供は絶えず活動する。活動力にすぐれた子供は、つねに新奇な對象を求めて止むまきがない。實生活的配慮の世界への徹底的批評者は一物、局部に捉はれる必要がない。同様に、子供もまた物を偏愛する動機を所有しない。すべてのものに對する平らかな愛しこゝにも兒童の性格を盛る決定的要素がある。本來の兒童は、いかなる事物に對しても敵意をもつものではない。己れを空しうして、事物を觀且つはたらきかける者に、好き嫌ひのある譯はない。兒童の自己中心的生活は、世界を自己のうちに寫し、自己を世界に向つて開示する状態に於て、その真相が見出される。

四

なん等著色されない無心さに於て、世界に對する生活者の一團に兒童が參加してゐる。かゝる精神態度は、一見幼

稚で、淺薄に思はれるかも知れぬ。しかし、物の公平無私な觀察即ち眞理への思慕は、こゝにその本格的衝動を閃めかしてゐる。單純で素直、率直で正直な物の觀方——これこそ兒童が休みなく敢行してゐるものである。

兒童の遊戲生活をみるに、かれらはいかなる對象さへいざも、恰かも生けるものゝ如く取扱つてゐる。事物へのかかる態度は、いかに考慮すべきであらうか。ひまは兒童を觀察するに當つて、先づ何よりも大人の偏見、偏察の一切を剥ぎ取らなくてはならぬ。子供が對象を生命者として觀する態度は、事物を單に外から分析して、法則的秩序の下に存在の個性を散佚せしむる器械的、理知的手段に訴へるのではない。概念的、抽象的觀察によつて、物々、部分間の理論的相關を究めるためではない。かれらは、たゞ偏へに、物の全體を活かしつゝ存在を一つの完全なる自體として親しまむがためである。分析作用以前に綜合活動がなくてはならぬ。兒童は單に物をみてるのではなく、物に於てその存在性格を觀てゐるのである。兒童は單純無雜な直觀力を備へてゐる。對象に自分を根柢に於て一者となす直觀

力、洞察力を所有してゐる。理論的認識以前に、生命的直観がある。生命的直観は事物の全體性の認識を強要する。

しかもこの強要は、日常的集約的意識、慣習、文化的傳統に捉はれないものうちに、最も活潑にはたらいてゐる。

しかし、われらの周圍に遊んでゐる子供は、その純眞な自然的性格をひきく傷けられてゐるために、われらはこの大人の子供の外皮を破つて、子供の活動狀態に直接侵入し、その核心、生地を率直に觀察しなくてはならぬ。大人は事物を利用し、實用化する必要から單に存在への或人爲的關心に注目するのみ。したがつて不用、無要な部分や事物には、概して不注意である。かくの如きは、眞に事物がもつ

本來性認識する態度は云ひ難い。子供にはかゝる豫想がない。かれらは事物を單に愛してゐるのみではなく、己れを空しうして在るがまゝの存在を愛してゐる。子供の事物への態度は愛から始つて愛に終る。己れを空しうして對する事物への態度は、そこにもゝ存在性、個性が、おのづから顯現せざるをえない。事物への全き認識は直観は、對象と主観が相隔りながら、しかも根柢に於て、同一、一者、

同胞、同質なる感識の上に成立する。この同一感こそ、眞理愛、藝術的衝動、宗教的感情いな本當の人間の感情の基調をなすものである。存在へかゝる愛の體驗は宇宙直観は、もつぱら、童心的・排先入主的魂の純眞性にもとづく。

子供は大人と動物との中間者ではない。むしろ、大人と動物を率ゆる有機的、超有機的生命活動をつらぬく生命自體、その佛を宿す象徴的存在は言はなくてはならぬ。それはかれが生計的脅威に煩されなうなためになく、かへつて、かゝる性格的生命者だからこそ、生計的脅威に捉はれないのである。

五

大人には唯物主義者が居る。しかし、おそらく子供は唯物主義者ではない。それはいへ又唯心主義者でもない。かへつて、唯物、唯心以前の世界に生棲してゐる。兒童は精神的存在物質の變輕性を體驗的に肯定する。しかも、兒童は極めて直截な生命主義者である。同時に最も自然的な個性主義者である。普遍のうちに特殊が息づいてゐるを生活的に了解してゐる。子供は理論的存在の此方の實在を直接に

交渉する。そこには特殊と普通、個性と生命が一者として存在する。こゝは理論と徳と藝術を創り出す根もこでである。子供はものを具象的相に於て眺め、形態の表面に滲み出た生命の輝きを直観する力を持つてゐる。子供は物質と共に精神を、精神と共に物質を、同時に、同機會に了解する。兒童は實在を隔て、観る以上に實在自から語るころに耳傾ける素直さ虚心さの心情を失つてゐない。子供は生命を通じて物をみ、いな、單に生命の無限の活躍をみてるにすぎぬ。子供に於て、世界はまさに、魂の舞踏場である。名利に驅られて暴れ騒ぐ人間界の不斷の鬭争の暗黒界を子供は知らない。知らなくてはならぬなんらの生活因、性格因を持たぬ。世界は原子の離散、聚合によつて成敗するのではなく、かへつて生命の飛沫は、物質と云ふ美しい象徴的衣裳をもつて舞踏する。

こゝろの窓の自由に開放されたところには、あらゆる存在が勢込んで流れ込み、又自由に流れ出づる。自づからを萬有のうちに溶かし、萬有のひきつの表徴點として自分を觀る兒童は萬づのものゝ特性を識る新鮮なる知覺の所有者

と言はなくてはならぬ。新鮮なる知覺に映する事物は、冷たい理性によつて出来上り、結びつけられてゐる概念的的存在とは異つて愛と親和のうちに交はりつらなつてゐる、全體的存在である。精神と物質との如き存在は、大人の理知と生活方便よりする概念的、分析的結論にすぎぬ。子供はもつと具體的世界に棲んでゐる。世界自體の自然性に即して生活してゐる。子供にまつて世界は一にして一切である。斷片的經驗に對して、純粹經驗、全一經驗である。思索、志向、感情は一切を擧げて、存在的經驗の中に、ひきつる渾一せる生命として溶け込まなくてはならぬ。故に、子供の認識と生活は具體的、全一的であつて、功利的、部分的でない。對象認識の態度は直觀的であつて分析的でない。種々の途を造り、物のいろゝの分別は、成長と共に延びて、大人の得意とするところであるが、本來の子供は物そのものに直ちに接觸する。子供はたゞ實在と戯れ、實在と親しみ、實在と私語し、實在と共に實在の一部として並び立つてゐる。

(未完)